

門へ手10
番 1274
巻 12



文章撰格上 下稿

橘守部撰述




文を言を記せしむ。言ハ心城速多あり。言を記せハ義麗
記を主^{ナホ}し。心を速^{ナホ}く通^{ナホ}え弁多^{ナホ}要^{ナホ}らせれハ。是を此
間^{ナホ}みて許登婆^{ナホ}と云。後世^{ナホ}やわうら。許登^{ナホ}も許登婆^{ナホ}を
乃如くやう行^{ナホ}し。許登婆^{ナホ}ハ本^{ナホ}言花^{ナホ}の義^{ナホ}を。言に文^{ナホ}あ
多^{ナホ}を言花^{ナホ}とハ云。他^{ナホ}國^{ナホ}も文章^{ナホ}と書^{ナホ}多^{ナホ}字^{ナホ}の意^{ナホ}も。
言に文^{ナホ}ありて心の章^{ナホ}多^{ナホ}を主^{ナホ}し。云たれハ。全^{ナホ}月^{ナホ}一
く空^{ナホ}あり。故^{ナホ}上^{ナホ}代の文詞^{ナホ}ハ常に口^{ナホ}傳^{ナホ}り云ま^{ナホ}くに記^{ナホ}し
て。口^{ナホ}語^{ナホ}の外^{ナホ}ハ於^{ナホ}のつ^{ナホ}り。文^{ナホ}あり。言に花^{ナホ}を咲^{ナホ}せし。

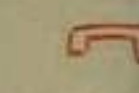
そのにららりたる道者多宇治大納言物語並好徒然
竹とりのりもいまこ俗文のほききあはれ今にまゝなる
る多うりかれハ今より後文うき習ひんハ専ら中古
以前ハ随ふこ一中古器ハ擬りんハも物語ぶり消息文
あはらるるハさてもあはれあはれハさき詞ふりりてハ上代
ハ習ひん外ハあはれハ故ハ大なるハ心もさもまゝハ詞と
今上代の文ハ筆法を考ふるハその大むハ既ハ長歌ハ換格
ハ引つらなき長歌のつけハや相似て五七の調ハか
きハほらるり故ハ長歌のうたけハさきハ疊句聯疊隔疊
疊對句隔對招應換響首尾章段譬喩序辭の十二種の拾

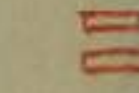
あはれハ一篇のうへに開るもまゝこく同ハりあがり中に
長歌ハ彼五七の調ハ何多ゆゑに枕詞多々文章ハ五七の
數ハ拘らざる故ハ枕詞をいそまれば其物其事を貴く
もさやハさるるもさるるハさきハさきハ實句異類光
彩數量方邊枝葉 此等のありき所以ハ短
哥換格ハ委ハくハ等等の語ハもを
以てあはれハさるる枕詞もそのゆゑハさるるハ短哥等
文章のうへハさるるハ選て彼聯疊變疊等の文ハさるる右の
異類光彩數量等の六種の飾詞をよこさるるハ短歌
ハさるるハ別ハさるるハ例ハさるるハ疊句ハさるる
さるるハ文章ハさるるハさるるハ物ハさるるハ聯疊をさるる

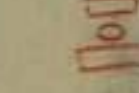
あはれとては也故更ハ文章の簽例を参るも左の如

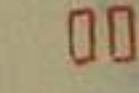
實句 


光彩 


方違 


疊句 

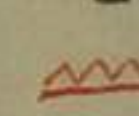
隔疊 


對句 


招應 

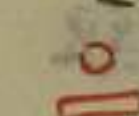
首尾 

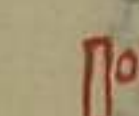
異類 

數量 

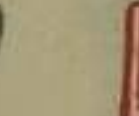
枝葉 

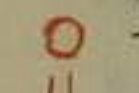
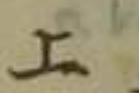
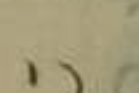
聯疊 


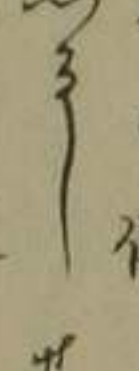
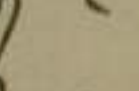
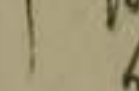
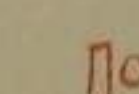
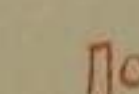
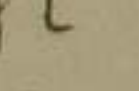
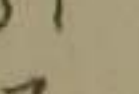
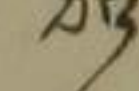
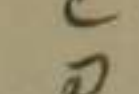
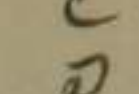

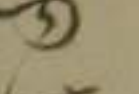



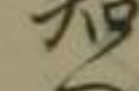
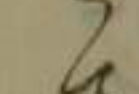
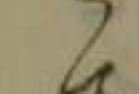
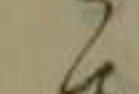
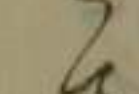
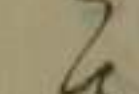
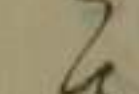
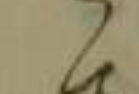
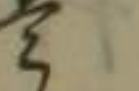
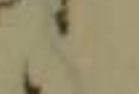
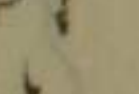
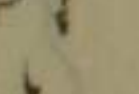
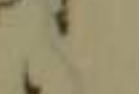
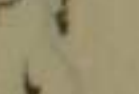
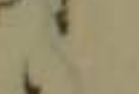
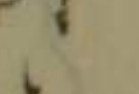
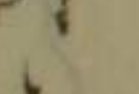


















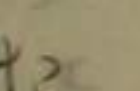
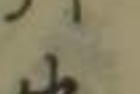
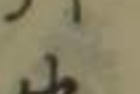
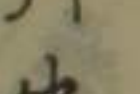
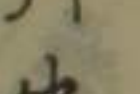
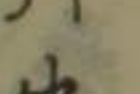
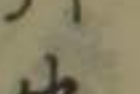
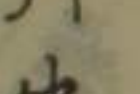
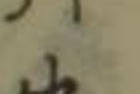
變疊 

隔對 

喚響 

章段 

右の内物の異類  三類連用  如此上小  をくりくつに三類連用

セ多ほとの句中左後ハ絶て尺々又短哥撰拾中不
中虚と名つけし多ハ姑く實句の例とすその中不ニ
類連用セ多ハ  如此  又歌ハ詞ハ
を重みセ多ハ  拾ハ云されと文ハ下へ引連
け  此格何  され 
如此  云 
凡此十八種を詞ハあやの極となりこれハ決々に引不
乃上代の文ハ章句に此簽の  加  多  見
てあや詞の  語  け
は  文  知 
此  十  八  種  の  中  小  大 
を  此  十  八  種  の  中  小  大 
を  此  十  八  種  の  中  小  大 
を  此  十  八  種  の  中  小  大 
を  此  十  八  種  の  中  小  大 

中津枝小 八咫かみをとりてのけ

下津枝小 白和幣

青和幣 をとりてこれ種々の物を

ふみまの命

あめのこやねの命

あめのこもりの命

あめのひらけをたをまふかた

あめのまをかりてや

あめのかく山のて葉をむ種ふか

あめの岩屋戸をけりてを路をりて

別本ニあめのひらけをたをまふかた

同 八丁十

故也よはえて 出雲國之肥の川 上なるやちか

其川より著流きくをき

あまのて見より以て

あまのて

中よすきそちあり

あまのて見より以て

あまのて見より以て

あまのて見より以て

あまのて見より以て

吾らもあはれなるに八雲のあきこころ高志れ八俣のさうらうを
年のさふきえくはるき時多れはふくまを以てその形を
りしに聞かむにそののいふかかちるは又頭八尾あし又

『さうらう 蘿あひ
檜木あひ』

杉木あひ』その長き 谷 八谷

峡 八峡あしりて

その腹をこれ悉くわつて血をこれいふと申す云々』そのをいふを

湯津九柳よりいふに『みつとつとつと』その是名推

手名推の神也

のりまにりまにり

八鹽折之酒をいふ

垣を作らむ

垣に八門を作り

門に八門を作り

酒船をおき

船に八門の

八鹽折之酒を盛て下

神代紀卷下

高皇産靈尊 真床覆衾と天津彦彦國光彦火瓊杵尊

きせ奉りて 天磐戸を引あけ

天八重雲を押しけ 天くく賜ひきこく

大伴連の遠祖天忍日命

末目部の遠祖天穗津大末目を帥て

あめの磐敷を引け

あめの御言を引け

あめの御言を引け

又八目のあめを引け

又頭槌のつまきを引け

あめみまの命のあめみまの命の日向の龍家の高千穂の穂日三上のね

ちう多天浮橋よいつりて下畧

古事記卷上 丁六十

天津日子番能通藝命 天之石位 天之八重多那雲をお

わさく 千別

千別て 天浮橋よ

浮志まうそく 竺紫の日向の高千穂

あめの御言を引け

あめ久米命二人

あめの磐敷を引け

あめの御言を引け

恨てせめあはまほしき人まを出たおあり
かまはれはまほしき人まを出たおあり
まほしき人まを出たおあり
まほしき人まを出たおあり

まほしき人まを出たおあり

顯宗紀室壽御詞

清きころは

清きころは 御心れまはるる

取あくる 御心れまはるる

取あける 御心れまはるる

取あける 御心れまはるる

取あくる 御心れまはるる

出雲ハ

まほしき人の 御心れまはるる

まほしき人の 御心れまはるる

祝詞式大校詞

集侍 親

まほしき人

おんくさ

百官人々を御奉りて

すくごの朝廷に仕奉る

領中かき伴のを

手鑑めく伴のを

ゆきあふ伴のを

大刀はく伴のを

別本ニ六十伴のを内ニ簽ヲ省ク

伴のをの六十伴のをくはめく官に仕奉る

人々のあやまちありてん難の罪を今年のみろはれつるの

大袂

袂ひつる

清めくするを諸まことせむ

高天原に神つる

まきくさくさくむの神を

神ろふ命りうて

神集へし集へし

神議りし議りし

吾皇御孫命ハ豊葦原の水徳之國を安國と平く志る

事よ

かきくさくさくむの神を

神問りし問りし

十一

神掃ひし掃ひし

語問一磐根

樹根

草の片葉を語止て

天之磐座を

天之六重雲を 稜威の千別

千別

天くま

西方の國中と大倭高見之國を

安國と定まつりて

下津磐根宮柱太き立テ

高天原より千木高きて皇御孫之命の瑞光御舎流まつりて

天の御蔭

日の御蔭とあがり坐て安國と平々志るやんぬちよ成出ん天之益
人等過犯ん雜の罪事ハ天津罪と

畦放

溝埋

樋放

頻蔭

串刺

生刺

逆刺

原戸

くまの罪を

天津罪くのり別

國津罪と

生けり

死にけり

ありひと

こくみ

己の母ありけり罪

己の子ありけり罪

母と子ありけり罪

子と母ありけり罪

けりありけり罪

けりありけり罪

けりありけり罪

けりありけり罪

天不四下國を

盡物せむつみ

あはれ罪出ん

天津宮事以て大中臣

天津金木を本打切

未刃断を千くくの

置るに

置足は天津管曾を

未刃断

未刃切て六針を取らむと天津祝詞の

大祝詞事を宣ふ

かく宣うは

天津神

天の岩門を押開て

天の八重雲を^三後威の^三干別

干別て^三も^三り^三え^三國津神

高山の^三末

短山の^三末より坐て

高山の^三いほり

短山の^三いほりをかきわきえきさうめえん

かきわき^三り^三め^三せ^三皇御孫命のみまを始め

天下^三四方國より罪

罪りあ

科戸の風は天之八重雲をふきえりつ事の如く

朝之御霧

夕之御霧を朝風

夕風のふきえりつ事の如く

天津^三邊を^三大船^三舳

艦^三を^三お掃^三り^三の如く

彼方の繁木^三を^三本^三を^三如く^三漁の

敏孫を^三ちて^三お掃^三り^三の如く^三邊を^三罪^三り^三何^三と

被ひ^三まひ

清女^三を^三高山の^三末

短山の^三末より^三居^三たり

早川の瀬もまを

瀬藏津比咩い神い大海原い持出いるん

かく持出いるは

荒鹽い之

鹽乃い八百道い之

八鹽道之鹽い六百會之座い速開都比咩いと云神持いか吞いん

かくの吞いん

氣吹い戸い坐いに

氣吹戸主い云神根いの國い

底の國い氣吹い放いちん

かく氣吹い放いちん

根いの國い

底の國い速佐い須良比咩いと云神

持佐い須良比いん

皇の朝廷いに任奉いる官いのい人い等いを

始いて天下い四方いは今日いより始いて罪いといふ

罪いのい高天原い耳振いきい物いと馬い牽い

立て今年いの六月いの梅いの日の夕い日のい大い被いふ

被いひいたいすいひ

清いくいるい諸いをいめいるい

田い原いのいトい部い等い大川道い持退いりて被いひ却いとい字いる

同出雲國造神賀詞

八十日ハあはれも今日のハ生日ハ

是日ハ出雲國國造姓名ハ

恐ハも申ハ

中畧
巳命のハ和魂をハ八咫鏡ハ取託テ倭ハ大物主ハ攝懸玉命ハ稱テ大御和の神ハ

巳命の御子阿遲須伎高孫乃命のハ御魂をハ葛木の鴨の神ハ

事代主命のハ御魂をハ宇奈提ハ

賀夜奈流美命のハ御魂をハ飛鳥の神ハ

皇御孫命のハ近守神と貢置テ八百丹拵築宮ハ

親神魯伎

神魯美命の詔ハ汝天穗比命ハをハみことのハ長のハ大御女をハ

かきふふ

いそひそひまつりハいりのハ御世ハをハ仰せハ返りハ次ハ

まふハいそひそひは奉テ朝日ハ豊ハ榮のハ神ハのハ也ハ

臣のハ也ハ御ハ

神たハ獻ラくハ申シ白玉のハ大御ハ白髪坐ハ

赤玉のハ大御ハあハ坐ハ

青玉のハ水江玉の行相ハあハ神とハ大八島國ハ

天皇命ハ自長ハ大御女ハ御横ハ廣らハ打堅ハ白ハ赤馬のハ前足ハのハ丸ハ

後足ハのハ丸ハ

蹈ハ大宮のハ内ハ外ハのハ御門ハ柱ハをハ

工津石根踏堅

下津石根踏凝し振きまのハ耳の弥高天天下を志るん

るのまの白鶴の生御調のりあまひ物と志れ大心を多親

彼方の古川

此方の古川まうま生まやわらうのわやあえ

子あえ

須之伎振遠正美乃水乃字弥遠知御をら

やそひの大神鏡のおきをわはるんをらるれぬ明御神の大

八鳥國を天地

日月と共安ら

平らくまらるんあまのま

御賀神寶をまけ持く神のあや

臣のあやと恐

恐も天津つそ

神はまの吉詞白

申

同大殿祭詞

高天原神作まら皇がわつらる

神ろまの命まら皇御孫命をま

高御座まら天津璽の鏡を捧持賜ひる

うづの御子皇御孫の命天津高御座まら天津日嗣を万千秋の

長秋大六洲豊葦原の瑞穂國を

安國と平らうと云ふを言ふと物して

天津御量より事問一磐根

木根たり

草の片葉を言止て天より言ひ食國の天下と

天津日嗣より命の命のみわを今奥山の大映小映より木を

齋部の

齋斧をもちて代採て木末を山神より齋鉏をり

齋柱を立て皇御孫命の

天之御翳

日之御翳と造り流るる瑞の命を汝屋命天津言護言を

言は

きくまひ白くくはります大宮地底津磐根の極

下津綱根の限りは虫の福

高天原青雲の靄極

天の血垂飛鳥の福はくほりかたなる

柱桁梁戸牖の錯動き鳴

事無く引結る葛日の緩ひる

取音草の噪きる

御床都比のやきる

伊豆都志はる

平ラ々

安ラ々ク守りまらる神の御名を白く

《屋船久能運命》

皇御孫命の御世を《堅磐名》

《常磐名をひまらして》

《ひりみよ》

《たろのみよをひまらして》

齋王作等ラ持ユまり

持ユまり造り仕奉れら《瑞の穴瓊の》

《あまふまこ》

《てらふまこ》をうけし齋部宿禰某ラ《よる肩》

《ふし袖》うけて言ほきいひまらるるの

漏レれんラを《神直日命》

《大直日命》まき直

見直レて平ラ々

安ラ々クまらしめせと白く詞別コトワキて

《大宮賣命の》前ヨ白く《大宮賣命と》御名を申さるる皇御孫命の同殿の

《裏ふ塞り》坐テまかり

《あまふまこ》人のまきびまらし神等のいまらこひあはれひまらるるを

言直

やいりまて皇御孫命の御世を《所食》

《ゆし》の《所食》仕奉る比礼かつ伴の踏

自次かつ伴の踏を

同養生主

吾生也。有涯而知也。

無涯。

以有涯。

隨無涯。

殆已已而為知者。

殆而已矣。為善無近名。

為惡無近刑。緣督以為經。

可以保身。

凡乎。故自無適有。以至於三。

而况自有適有乎。

無適焉。因是已。云云

手之所觸。

足之所履。

肩之所倚。

膝之所踣。

嚮然。奏刀。

騞然。莫不中音。合於桑林之舞。乃中經首之會。

文惠君曰。善哉。技蓋到此乎。

左傳 隱公元年

請京使居之。謂之京城大叔。祭仲曰。

都城過百雉國之害也。先王之制。大都不過參國之一。

中五之一。

小九之一。今京不度非制也。

君將不堪。公曰。姜氏欲之。焉辟害。

對曰。姜氏何厭之有。下如早為之。所無使。

滋蔓。

蔓難圖也。

蔓草猶不可除。况君之寵茅乎。云云

同 僖公四年

齊侯以諸侯之師侵蔡。

蔡潰。遂伐楚。

楚子使與師言曰

君子處北海。

寡人處南海。唯是風馬牛不相及也。不虞君之涉吾地也。

何故。管仲對曰。昔召康公命我先君大公曰。五侯

九伯女實征。

之以夾輔周室。賜我先君履。東至于海。

西至于河。

さあけいりよまふいふくうううう

けわふさすまはちえいん

きびてふいりき

うけくういりやあんいりりりり

わいりりりりりりりりりりりりりり

あうもあれいりりりりりりりりりり

程めくういりりりりりりりりりりり

おれいりりりりりりりりりりり

竹取物語 初丁

うまあういりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

その竹の中ういりりりりりりりりり

あやういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

あういりりりりりりりりりりり

叶もよひついでるもあしきよき

同三段

むらもあしき

女のそよひはあまのそよひ

あひひあしき

一條のそよひかきもほろりまうり

あしき

宇都保物語 後巻 初丁

むらもあしき 左大弁 ころも 清系君あしき

みちもあしき 一人あしき

そのこころもあしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

横をぬき日たぐく影を照すかき

〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

あき〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

き〜 あ

子〜 あらうを踏ひてまかりち或能くまよたはれぬ

その〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

女〜 まる〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

あ〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

女〜 まる〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

あ〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

父母〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

あ〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

〜 隆閑の志こゝして草わさよえあつふふ

りつもの御時より女房多御前あはれはしむる御事申すに
あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

あはれはしむる御事申すに

かくして古事記書紀のまづの文を推て察を多ふらむ
又漢文の方より字をまて常の言をみまらうしむるは
多かりしそのよりの古事記太朝臣安萬侶大人の自
序より上古之時。言意並朴。敷文構句。於字即難。已因訓述
者。詞不逮心。全以音連者。事趣更長。是以今或一句之中
交用音訓。云々といひて文字の多く貴をりて厭へり
漢文のまづの字の多かりしより。章句の隔の多かりしより

天地初發之時。於高天原成神名。天之御中主神。次高
御產巢日神。次神產巢日神。此三柱神者。並獨神成坐而

隱身也。次國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣琉之時。
如葦牙因崩騰之物而。成神名宇麻志阿斯訶備比古遲
神。次天之常立神。此二柱神亦獨神成坐而隱身也。
とあるは一語ありて。彼阿禮主の口誦也。亦古語ハ

天地の初の時。高天原の神成りし神。
其成りし神の御名。天之御中主神。

次高御產巢日神の御名。高みむまひの神。

次神產巢日神の御名。神産巢日神の御名。
此三柱の神。初の國稚。浮脂の。海月を。海月を。海月を。
天地の初の時。國稚。浮脂の。海月を。海月を。海月を。
とあるは。よつと。葦牙の。とあるは。とあるは。

志すもあらずあつて成りし神の御名は「伊弉諾」
の神

決り成りし神の御名は天之常立の神

此の神の御名は「伊弉諾」
と云ふ。痛く人を奉る長くあれを願ふ。記者の見ず。

其際この言をよみて右の本文の如くかきかへし
んえりて、さて次の神代七代をく、此の起す。一章

毎に天地初發之時、云々いふのあり。ありしなり

多むりなり

同記 十三丁

故爾伊弉那政命詔

愛も吾ちふの命や子の^ミミきよか^ミ後を^ミ詔^ミよひて

御枕^ミよほりて

御^ミ言^ミよほりて^ミ流^ミる^ミ時^ミ中^ミ喜^ミま^ミれ^ミり^ミ千^ミ引^ミ石^ミを^ミ其^ミも^ミ平^ミ坂^ミ引^ミて

其名を中^ミ置^ミてあひむ

事^ミ申^ミす^ミ伊^ミ弉^ミ那^ミ美^ミ命^ミ申^ミす

愛も^ミ吾^ミち^ミの^ミ命^ミか^ミく^ミま^ミた^ミ子^ミの^ミ國^ミの^ミ人^ミ奉^ミる^ミ

千^ミか^ミら^ミり^ミ

殺^ミさん^ミ申^ミす^ミ伊^ミ弉^ミ那^ミ政^ミ命^ミ詔^ミす

愛も^ミ吾^ミち^ミの^ミ命^ミか^ミく^ミま^ミた^ミ子^ミの^ミ國^ミの^ミ人^ミ奉^ミる^ミ

千^ミ音^ミら^ミり^ミ

ん^ミ詔^ミす^ミん

[Faint handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side]

出雲風土記上 新本四丁

意字とをけしむる意に國引ませり **八束水臣津野命**の詔しきく **八雲**立出雲國の
狭布の**稚國**もさる

幼國ちいさくつとるりかれり **縫**ちと詔しひて **栲衣**さるもの

三崎を
國の餘りありやとんれい **童女**の**胸鉏**さる
國の餘りありと詔しひて **大魚**の**鯢突**さる

旗薄ほりりさる **三槌**の**綱**さるもの

霜葛シロカへあらしくも

河舟カフネのりきりくも國々クニクニ未々ミミ引未ヒキミ縫ヌイて國クニの去豆コクマの打ウチ絶ツツりて八百王ヤフヤフ

杆築カサキの所トコロ埒アハなりかて國クニ堅ツル立ツは石見國イシミと

出雲國イツノの坂サカなる名ナ佐比賣サヒメのふり

又持マテ引ヒキ綱ツナの園ノの長濱ナガハマにあり又北門キタカドとよれ國クニを

國クニの餘ヨリありやもれ 童女コウメの胸鈕ムネヅミとて

國クニの餘ヨリありと詔ミコトノコトありて 大魚オホイサの鯰突ニギツキとて

旗薄ハタヒほりてけり 三槎ミササの綱ツナとて

霜シロつらへあらしくも

河舟カフネのりきりくも國クニ未ミと國クニ未ミと引未ヒキミ縫ヌイて國クニの多タ久クの古コ終ハヤシりて扶田サカの

國クニにあり又北門キタカド農波ヌナミの國クニを

國クニの餘ヨリありやもれ

國クニの餘ヨリありと詔ミコトノコトありて童女コウメの胸鈕ムネヅミとて

大魚オホイサの鯰突ニギツキとて

旗薄ハタヒほりてけり 三槎ミササの綱ツナとて

霜シロつらへあらしくも

河舟カフネのりきりくも國クニ未ミと國クニ未ミと引未ヒキミ縫ヌイて國クニの手結テムスビの打絶ウチツツりて

爾見國ニミにあり又高志タカシの都ミヤの三埒ミヤを

國クニの餘ヨリありやもれ

國クニの餘ヨリありと詔ミコトノコトありて童女コウメの胸鈕ムネヅミ所取トケて

大魚オホイサの鯰突ニギツキとて

旗薄ハタヒほりてけり 三槎ミササの綱ツナとて

霜黒葛へちりくふ

河舟之もきりくふ國のりくふ

引未縫國之穂の埒あり
持引之綱ハ夜見島にあり
固堅立加志伯耆國之大神也

今者國引訖ぬ詔とて意字社御杖衝て意惠と詔とて故

云意字

この條にかく章段毎の吾ふもの命やう云ぬれもきりくふ
さうふかみそ云云の今此縫國の埒ありやとんれ
ハ國の餘あり云云何れもさう同例あり今世の便言は言
並もとい是不同し上のをりくふさうりくふとてさき
やう故古文の句法とて別なりなりさきおひの何れもさき

物さぬ女もども又或ひかゝるあつり人の物語をさうとそ
らうに筆記して見れば其の即古文の句法をさうとそ
知る人ハ言さうとそいふとそいふとそいふとそいふとそ
さ成さうとそいふとそいふとそいふとそいふとそいふとそ
けり 社氏出由風土記の文のさうとそいふとそいふとそ
文も一部さうとそいふとそいふとそいふとそいふとそ
が漢字もさうとそいふとそいふとそいふとそいふとそ
あつりしと神もさうとそいふとそいふとそいふとそいふとそ
さうとそいふとそいふとそいふとそいふとそいふとそ
さうとそいふとそいふとそいふとそいふとそいふとそ
さうとそいふとそいふとそいふとそいふとそいふとそ

其一、飾り詞の多き故也。其二、疊句の多き故あり。
其三、章段の多き故也。飾り詞を、水穂國と云
くを、千五百之長五百秋之水穂國と云、御饌と
云くを、皇御孫命乃、遠御膳乃、長御膳と云、木
を伐て、遠山近山、生立苗大木小木を、
本打断、末刈切て、持参来て、あつらひ類を、
荒妙、御服者明妙、照妙、和妙、
下を守り、上よりゆくを、上を守り、夜の守り、日の守り
も、守り奉る、云々、重ねて、よき地を、宮を定て、
身を、吾宮者、朝日れ日向、處、夕日の日隠る處、龍

田の立野の小野、吾宮者定奉て、吾前と云云、重
ねて、類ひあり、章段と、段を、あつらひ句とを云、
前後を引る文、の、章句に傍り、如斯、葵を、
て、即是也、々其、所以を、彼、神代記、
真床、覆衣を、云々、
あつらひ、磐石を、引あけて、
あつらひ、重雲を、引あけて、
上、の、段、つら、覆衣を、引あけて、天、の、磐石を、引あ
つら、天、の、磐石を、引あけて、天、の、磐石を、引あ
つら、天、の、磐石を、引あけて、天、の、磐石を、引あ
つら、天、の、磐石を、引あけて、天、の、磐石を、引あ
つら、天、の、磐石を、引あけて、天、の、磐石を、引あ

科戸の風の天の八重雲を吹く事を知り

